

日本小児感染症学会若手会員研修会第4回安曇野セミナー

予防接種後有害事象と副反応

グループD ミニレクチャー

田中敏博*

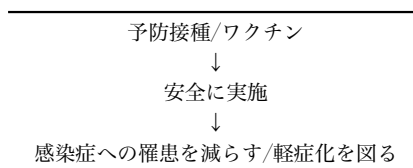
今から約200年前、ワクチンの歴史はジェンナーの手によって幕が開けられたとされている。当時は、人々が、そして社会が、正体不明の病気(実際には「感染症」)に、日々恐れおののいて生活していたのではないだろうか。それが、ワクチンを接種することによって予防できる時代となり、社会的な衛生環境の整備・向上とも相まって、いくつもの感染症がコントロールされるようになった。

「ワクチンをうつ」という予防接種の目的は、感染症を予防し、罹患者を減らし、罹患した場合でも軽症ですむように備えることである。ワクチンをうつ、その対象者は基本的に健康である。その健康な者に針を刺して傷つけ、あるいは飲ませて、軽微とはいえ一時的にでも病的な状態に曝す行為である。したがって、本来の目的を果たすその過程で、予防接種が安全に実施されることは大前提でなければならない(表1)。

予防接種/ワクチンによって予防可能な感染症がよくコントロールされると、かつてはそれに恐れおののいていたはずの人々も社会も、コントロールされた状態が当たり前のものを感じてしまうようになる。そしていつしか、それが予防接種/ワクチンによってもたらされた恩恵であることも忘れがちになる。

一方で、多くの人に予防接種が実施されていくと、ある割合で負の反応や事象が接種の後のタイミングで発生する。軽微なものでは局所の疼痛や発赤、発熱、重篤なものでは髄膜炎、ギランバレー

表1 なぜ、予防接種？



症候群、死亡などである。実際にそれが接種と因果関係がある場合もあれば、ない場合(=たまたまの紛れ込み)もあるが、そもそも健康な者をあえて病的な状態に曝すという行為の後であるためであろう、どうしても接種自体が目につき、やり玉にあげられやすい。また、接種によって予防しようとしている本来の感染症の症状の程度や発生頻度、実際に罹患した場合に生じる合併症の程度や頻度に比べて、接種後の負の反応や事象は軽く、まれであることが通常である。しかし、感染症自体の記憶が薄れ、やがてなくなってしまうえば、接種後に生じる反応や事象がすべて一大事である。医学的に客観性をもって有効性と安全性を論議していくべきであるのに、どうしても感覚的、主観的、ときに感情的に判断されやすい(表2)。

予防接種/ワクチンについては、有効性と安全性とにバランスよく目を向けていく必要がある。ところが昨今は、安全性だけに着目し、接種するかどうかの議論に終始して、そこから一步も前に進むことができなくなってしまうことが少なくない。予防接種/ワクチンの本来の目的を見失ってしまっている状態である。そしてついには、接

* 静岡厚生病院小児科

表 2 みえない効果, 目につく有害事象

<p>予防接種/ワクチン</p> <p>➤効果は, ワクチンで予防が可能な感染症がよく抑えられている現況では, 実感されにくい.</p> <p>➤有害事象は, 実際に副反応であること, すなわち因果関係があることの証明は困難であるが, 放っておいても目につく. したがって, 感覚的・主観的に判断されやすい.</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>可能な限り, 客観的に評価していくことが必要</p>

表 4 マスコミの標的にされたワクチン

<p>➤種痘: 種痘禍</p> <p>➤インフルエンザ: 学童の集団接種</p> <p>➤MMR: MMR 裁判</p> <p>➤日本脳炎: 積極的勧奨接種の差し控え</p> <p>➤同時接種: Hib と肺炎球菌ワクチン接種の一時見合わせ</p> <p>➤ポリオ: VAPP-生 vs 不活化</p> <p>➤風疹: 成人での流行とワクチン不足</p> <p>➤日本脳炎: 美濃市の接種後のタイミングでの死亡例</p> <p>➤子宮頸がん: 複合性局所疼痛症候群 (CRPS)</p>

種していれば守れていたはずの健康を, 命を, 防げたはずの感染症で失ってしまうという, 予防接種/ワクチンを手にしている現代にあって大変残念な結果をもたらすことにもときとしてつながっている (表 1).

時間的に接種の後に生じたすべての負の反応や事象は「有害事象」である. そのうち, 接種を原因とする反応や事象が「副反応」である. 接種部位に生じた発赤や腫脹は多くの場合「副反応」であるが, 例えば, たまたま溶連菌感染症の潜伏期間に接種したとすれば, その後に生じた咽頭痛や発熱は, 接種とは無関係の単なる「紛れ込み」の可能性が高い. 接種後に帰宅する途中, 犬に噛まれば, これも「有害事象」に該当するが, 接種が原因となった「副反応」でないことは自明である. このように, 「前後関係」があることと「因果関係」の有無とは全く別物であり, したがって「有害事象」と「副反応」も区別して判断すべきであるが, しばしば混同して扱われているのが実情である. また, 針を刺すという行為を伴う接種に対する先入観が存在することが, すなわち「バイ

表 3 有害事象と副反応

<p>有害事象</p> <p>副反応</p> <p>前後関係</p> <p>因果関係</p> <p>紛れ込み</p> <p>バイアス</p>
--

表 5 マスコミによる医学報道の問題点

<p>① 医学的なインパクトよりも, 社会的なインパクトを重視する傾向にある.</p> <p>② 医学の専門家ではないのに, 医学の専門家の言葉をつなぎ合わせて, わかった気になって記事を書くことが多い.</p> <p>③ 事後検証がない/不十分. 及ぼした影響を自己評価せず, もちろん責任もとらない/とれない/とろうとしない.</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>その程度の情報である, という受け止める側の認識が必要</p>

アス」となり客観的な判断の前に立ちほだかることになる (表 3).

予防接種/ワクチンに関しては, それを受ける側の一般市民のみならず, 提供する側の医療従事者までもが, マスコミの情報によって気持ちを揺さぶられることが多々あるようである. それほどテレビや新聞, 現代ではインターネットにおける発信力が強力であるといえよう. こうした情報が医学的に正確で, 客観性をもって伝えられているならば問題はない. しかしながら少なからず, 前項 (表 3) で述べたような点が整理されないままに報道されることにより, 結果として正しくない判断を一般市民および医療関係者, そして行政にまでもたらすことにもなりかねない. 過去にそうした流れで迷走した, そして現在も迷走し続けているワクチンは, 一つや二つではない (表 4).

表 5 に, こうしたマスコミの医学にかかわる報道における問題点を列挙した. 少なくとも, 報道にリードされる形で予防接種/ワクチンの方向性を見失い, 誤ることがあってはならない.

予防接種/ワクチンによって多くの感染症から人々が守られてきた, そしてこれからも守られていくことは間違いのない. それを完全に安全な形で

遂行していくことが理想であるが、ある割合で有害事象は発生し、そのなかに因果関係を有する副反応も、無関係の紛れ込み事象も含まれることとなる。この問題を克服していくための課題を表 6 に列挙した。予防接種/ワクチンの有効性と安全性が医学的、客観的に論じられ、人々に、社会に、その恩恵が広く長くもたらされていくことを期待するところである。

表 6 予防接種後有害事象と副反応 課題

-
- 総力をあげての安全性の追求
 - 正確な有害事象報告システムの構築
 - 正確な情報を発信するシステムの構築
 - 一般市民の教育：なぜ、予防接種/ワクチン？
 - マスコミの教育：ニュース性よりも科学性を
-

* * *